世界遺産講座

第21講

ヌビア遺跡群救済キャンペーン

世界遺産講座第21講では、世界遺産誕生に至る数々のドラマの中でも重要な位置を占めるヌビア遺跡群救済キャンペーンについて紹介します。

「エジプトはナイルのたまもの」という言葉はご存じでしょうか。古代歴史家ヘロドトスの『歴史』に記された一言で、古代エジプトの繁栄ぶりを示したものです。エジプトはご承知のとおり、古代四大文明の一つで、栄華の証明として現在も多くのピラミッドなどが残されています。この繁栄をもたらしたのが、ナイル川の豊かな水です。年間を通してほとんど雨量のないエジプトでは古くから農業生産が盛んで、その生産力をもって巨大な古代文明が発達しました。まさにナイル川の存在が国家にとって重要な位置を占めることがわかります。しかし全長世界一とされるナイル川は巨大で氾濫（はんらん）などの災害も伴うことがあります。そこで、エジプトでは、その危機を減らすとともに安定的な灌漑（かんがい）用水の確保のためにダムの建設を計画しました。このダムの建設が世界遺産と深い関わりがあるのです。今回はダム建設に伴う遺跡群の救済キャンペーンについて紹介します。

ナイル川の氾濫防止と灌漑用水確保を目的として、１９０２年にアスワンダムが建設されました。しかしこれだけでは問題が解決しないことから、さらに巨大なアスワン・ハイ・ダムの建設が決まりました。しかしこのダムの建設によってエジプトからスーダンにかけてのヌビア地方の25の遺跡がダムの中に沈んでしまうことが明らかとなりました。当初の計画では、全ての遺跡を水没するとしていました。しかし国際社会からの批判が相次ぎ、エジプトとスーダンの両政府からユネスコに支援の要請がありました。ユネスコはすぐにヌビア遺跡群救済キャンペーンを実施し、世界各地で古代エジプト展を実施するなどとして、協力と援助を求めました。１９６５年に東京国立博物館で開催されたツタンカーメン展もその一貫です。このような活動の結果、遺跡保存の総事業費約８０００万ドルのうち、約半分が約50カ国からの募金によってまかなわれ、他にも考古学的な調査や技術的な支援も行われました。ダム建設は国民にとっての悲願でもあったため、中止されることはありませんでしたが、遺跡はダム建設に影響のない高台に移されることとなりました。岩を彫り込んで築かれた巨大なアブシンベル神殿は高さ33メートル、幅38メートル、奥行き63メートルの規模を誇ります。これを１０００個弱のブロックに切断して移転しているため、その費用や労力は計り知れないものといえます。

ヌビア遺跡群救済キャンペーンはエジプトの重要な遺跡の保存に大きく寄与しました。しかしこの問題の解決はユネスコが主導して実施したため、各国共通のルールづくりだけではなく、一国の課題を解決するために世界の国々が手を取り合って実施していくモデルを生み出しました。同様の取り組みはイタリアのフィレンツェ・ヴェネチア、インドネシアのボドブドゥール遺跡、チュニジアのカルタゴ、タイのスコータイ遺跡、ギリシアのアクロポリス等の保存にも大きく貢献しました。この状況下において、ユネスコから世界的な価値を有する文化遺産を保護するための必要性が提起され、世界遺産の誕生に繋がりました。人類共通の財産として次世代へ確実に伝えていくための世界遺産誕生に至るまでには様々なドラマがありました。ヌビア遺跡群救済キャンペーンも重要なドラマの一つといえます。

（明日香村総合政策課）